

兵庫の治山・林道と森林整備

やまなみ

題字／会長 谷 公一



瀬川林道と新緑のカラマツ林

第50号
令和3年6月発行

●令和3年度 兵庫県林学職新任職員の紹介	2・3
●令和3年度 林務課 予算の概要	4・5
●令和3年度 豊かな森づくり課 予算の概要	6・7
●令和3年度 治山課 予算の概要	8
●令和3年度 鳥獣対策課 予算の概要	9
●林業遺産「再度山の植林」に関するエピソード(2)	10・11
●～森林土木OJTシリーズ～ 3.治山事業の計画(1)溪間工事の計画と施工	12・13
●ニホンジカの食害による自然環境の変化(13) シカが好まない植物	14・15
●創立50周年記念誌の発刊について	16・17
●～林学職場の風景～ 阪神農林振興事務所・丹波農林振興事務所	18・19
●協会だより	20

林業遺産「再度山の植林」に関するエピソード(2)

兵庫県森林組合連合会・元兵庫県六甲治山事務所長 山田裕司

前号では明治時代に再度山周辺で始まった植林について、神戸市による植林工事と兵庫県による砂防工事、それらの現地状況を伝える神戸又新日報の記事を紹介しました。今回は、その他の関連するエピソードについてご紹介します。

1 林業巡回教師

明治時代に兵庫県の林業巡回教師が、再度山の植林に深く関わっていたことがわかっています。林業巡回教師については、兵庫県公館に保管されている明治39年の職員名簿に職名がありました(写真-1)。この名簿の林業巡回教師「小橋省二」は、大日本山林会報284号「兵庫懸における砂防工事」(明治39年7月15日)の「会員小橋省二」と思われます(写真

-2)。この名簿で小橋が「無給」となっていたことを疑問に思い、名簿の他の頁を見ると小橋が良元砂防工営所の技手としてもその名前が載っていました。

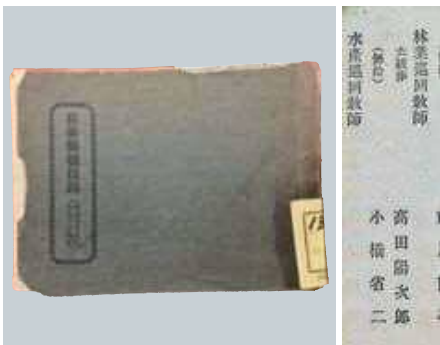


写真-1 兵庫県職員録(明治39年)と林業巡回教師「小橋省二」

良元砂防工営所は、明治28年から逆瀬川や太田多川流域で始まった砂防工事の専門事務所で、小橋省二は良元砂防工営所の技手と本庁の林業巡回教師を兼務していたようです。

なお、この職員名簿でもう一点興味深い名前を見つけました。(神戸)市技師の「林五八」です(写真-3)。

この職員名簿は県職員だけでなく、県下の市町村職員の名簿も兼ねていたようで、神戸市職員のページに名前がありました。前号で紹介した当時の植林の経緯が詳しく記された大日本山林会報287号(明治39年10月15日)(以下「会報」)によると、明治34年に神戸市は県に再度山の荒廃状

況調査を依頼します。会報の記述では「当時林業巡回教師たりし、林五八及び(略)をしてその調査に従事せしむ」と微妙な表現があることから、林の所属は、明治

34年は県の林業巡回教師で、明治39年には神戸市の技師に転職していたと考えられます。



写真-3 兵庫県職員録の神戸市技師として載っている「林五八」

2 「山榿」について

会報によると、再度山の植林は、黒松苗と山榿苗を植栽したと記されています。この「山榿」は、ヤマハンノキ(Alnus hirsuta)ではなく、ヒメヤシャブシ(Alnus pendula)のようです。大日本山林会報156号(明治28年12月15日)「山榿の調査について」で、「山榿」はヒメヤシャブシであると報告されています。「ヤシャブシに似るが、葉の長さが幅の3倍以上、葉脈が30本以上のものもある」と、ヒメヤシャブシの葉の特徴を記しています。また、「別名ハゲシバリ」とも記されており、ヒメヤシャブシと特定できます。前号で紹介した神戸又新日報の記事中にも、『松及^{ひげしば}髭縛を雑植する』とあります。「髭縛」は「禿縛」の新聞記者の聞き間違いと思われる。

3 本多静六と神戸市との関係

本多静六は、再度山の植林の指導のため明治32年と35年に現地に訪れています。神戸市ではその36年後、昭和13年に700名を超える死者など甚大な災害となった阪神大水害が発生します。本多は同年10月に再び神戸を訪れ「治水の根本策と神戸市背山に就いて」と題して講演を行っています。講演の中で、36年前に坪野神戸市長の依頼で再度山を調査し、造林の計画を立てたことや、それにもかかわらず大災害が発生したことに責任を感じたと述べています。また、造林の様子を写真で残すようにしたとも述べており、現存するガラス原板は本多の指導により撮影されたと確認できます。

このように本多は神戸市に深い思いを持っていたことがわかります。実は、本多と神戸市との意外なエピソードがあります。本多の親族である遠山益氏(お茶の水女子



写真-2 大日本山林会報284号の小橋の報告「兵庫懸下に於ける砂防工事」

大名誉教授)が次のように紹介しています(本多静六通信21号(2013))。明治23年(1890)に本多がドイツに留学するため船で出発します。一等や二等客室は貴族のような扱いでしたが、本多が乗った三等客室は牛馬のような扱いで、地獄のような船旅だったようです。そこに一等客室からやって来て本多を励まし勇気づける日本人がいて、それが後に神戸市長となる坪野平太郎でした。これ以来二人の間に固い友情と信頼関係が築かれたといえます。この時の二人の出会いがなければ、本多が再度山に来ることがなく、再度山の植林は違ったものになっていたかも知れません。

4 ガラス原板

ガラス原板は5枚存在し、神戸市森林整備事務所に保管されています(写真-4)。5枚のうち3枚は、試験植林の斜面をほぼ定点から撮影されており、成林していく経年変化が記録された全国的にも古い貴重な写真であり、学問的にも価値の高いものです。

ガラス原板写真は非常に解像度が高いため、写真を拡大することで多くのことがわかります。積苗工の下段に石積みが1段詰まっていたり、植栽のマツが3年生程度であることがわかります(写真-5)。また、石積みの積み方や石の大きさも確認でき、写っている石積みが現地に現存することも確認できます。



写真-4 ガラス原板

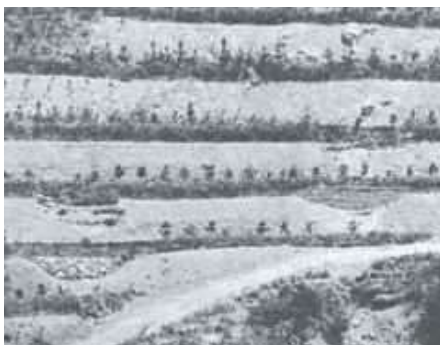


写真-5 ガラス原板の拡大写真、植栽木が3年生程度のマツであることや植栽間隔がわかる

5 今後の活用

林業遺産に認定された区域をはじめ再度山周辺一帯は、神戸市が再度公園として適切に管理しています。再度山を望む場所には、神戸市が「六甲植林発祥の地」の石碑(写真-6)や植林の写真をモニュメントとして設置し、訪れる市民へのPRに努めています。今回の林業遺産認定証も再度公園の風楽山荘内に展示される予定です。

また、兵庫県六甲治山事務所でも、一般市民を対象に、林業遺産認定箇所とあわせて周辺の治山ダムや山腹工跡地などを紹介するツアー(前号で六甲治山事務所が紹介)を開催(写真-7・8)しています。今回の林業遺産認定を機会に、現在は非公開のガラス原板の展示や、現地に残る石積みの解説版の設置などが実現できればと期待しています。再度山が先人たちの多くの努力により、はげ山からよみがえった豊かな森林であることを積極的にアピールできる場所として、全国に発信していければと願っています。



写真-6 「六甲植林発祥の地」の石碑



写真-7 昭和44年施工のスリット式治山ダム(六甲治山事務所提供)



写真-8 六甲山の植林と治山の歴史の概要説明を聞くツアー参加者(六甲治山事務所提供)